

生石高原に立って(有田川町)

絵と文・熱田親意 題字・熱田秦華

熊野古道

みちのくさき記

45

秋が深まると山野のススキの穂が白髪のように変わり、年齢のせいかな、親しみを覚える。ちょうど新聞に掲載された真っ白なススキに

生石高原笠石付近のススキの草原(有田川町)にて



覆われた生石高原の写真が目にとまり、登りたい衝動に駆られた。広川町の稲むらの火祭りが行われた10月15日、正午に生石高原の頂上に着く予定で和歌山市駅を車で出発。阪和自動車道から県道を

こゝまでは神社の神木となる巨木を足元から見上げ、木の国の偉大さと畏れを感じてきた。今ススキ越しに見る山並みは、地球の営みが生み出した生命力を宿していると思っ

た。シヨベルカーでは到底創れない山川の褶曲、自然の美しさは言葉で言い尽くせない。駐車場から標高870mの生石ヶ峰を

き上げてくる風に揺れるススキの穂が、逆光線でスタンドグラスのようにキラキラときらめき、美しかった。ススキを軍事物資や屋根葺きに使うことはもはやない。だが、草原や道路脇に生えるススキは防風垣や土砂流出防止の役割を果たしている。木の国の森や林が営みを続け、生態系を維持するため、なくてはならない存在である

生命力宿す「木の国俯瞰図」

だ水面に糸を垂らしていた。祭礼行事として歌舞伎を奉納する城山神社、治水と発電目的で作られた二川ダム、

かに見える笠石に登ると視界が更に広がり、「木の国の頂上」に登ったかのような錯覚に陥った。

足元には、広い2本のスロープがススキの白い穂のカーペットで覆われ、はるか下方に幾重にも延びていた。笠石を降りた場所にあるススキに囲まれた広場では、家族連れやカップルがそれぞれに開放空間を満喫してい

ために働いてもらうことに気がかされた。今年、ノーベル医学賞を受賞した大隅良典・東京工業大菅教授の「役に立つ、事業になる科学技術だけを求めていくと、文化のない社会に堕ちていく」という言葉を思い起こしながら草原を後にし、祭りへと向か

軒先に山菜を干す農家など山村風景を右手に見て間もなく、県道上清水線に入る。S字の上り坂を一気に進むこと10分、頂上からは幾重もの山系が足もとまで伸びていた。「木の国俯瞰図」の眺めが足元に広がった。

放空間を満喫している。風を下りてみると、吹

ふわふわと山肌覆ふススキの穂 秦華

ふわふわと山肌覆ふススキの穂 秦華